

語彙研究の方向性

岩本真理

目次

- 0 はじめに
- 1 岩本1989b「『南山俗語考』の語彙的特徴」の問題点
- 2 竹越孝・斉燦・余雅婷・陳曉2021
- 3 語彙研究とは
- 4 『岩波中国語辞典』の「意味による索引」
- 5 太田辰夫1963『『兒女英雄伝』語彙調査』
- 6 具体的検討—動詞“拿”を例にとって
- 7 今後に向けて
- 注
- 参考文献

0 はじめに

本稿は、拙稿1989bの問題点を指摘し、語彙研究における陥穽を明確にして、今後の研究への一つの視座を提供することを目的とする。

1 岩本1989b「『南山俗語考』の語彙的特徴」の問題点

拙稿1989bは、薩摩藩第25代藩主、島津重豪の命により編纂された『南山俗語考』（文化9年1812年）の収録語彙を対象とした初歩的な分析である。この直前に発表した拙稿1989aでは、稿本から刊本への変更箇所、とりわけ語彙の配列位置の変更と語彙の差し替えに多くの記述をおこない、語彙についての言及は、貿易実務ならではの交易品等に限定していた。

その後に発表した拙稿1989bは、語彙的特徴の解明を企図しながらも、その記述は、以下のように、文法的特徴と一部方言語彙との一致・不一致という記述に終始する。

- ①太田1965にある北京語の文法上の指標に基づき、北京語との距離感が明らかになる
- ②授与動詞“把”のふるまい
- ③否定詞“不曾”が優勢 “未” “未有” “没有”の少数例への言及
- ④方向補語“落来” “落去”が優勢で、“下来”はごく少数

⑤結果補語“掉”、“脱”の存在

⑥有+動詞 閩南語的要素の混入か

⑦親族名称 概ね南方的だが一部、該当地域が検出できないものが含まれる

⑧その他 個別語彙には、呉語と重なるものが相当数みられる

以上は、佐藤 1973、佐藤 1979、日下 1974 などによりつつ、南北差に着目した論点ではある。大半を文法的なふるまいが濃厚な語彙を抽出して得た結論である。数年後に発表した拙稿、岩本 1993 は、『南山俗語考』の唐音カナ表記の状況に依拠して、稿本から刊本に至る過程で、音系を「南京音」から「浙江音」へと変更したと断ずる。音韻においては、中古音の体系にあてはめ、配列しなおした上での考究ができ、個別の現象を体系の中に位置づけて判断を下すという方法が確立している。しかしながら、語彙の研究の場合は、一部の語を取り上げ、それを資料の特性を判別するためのいわばトマス試験紙のようにあつかうことがある。一部語彙の抽出で当該資料の「語彙的特徴」を論じることは断じて避けるべきであろう。拙稿 1989b は『南山俗語考』の所収語彙全般を理解したうえでの論述とはなっておらず、さらには同時代資料、近似するとみなしうる資料との対照もなされず、極めて不十分な内容と言わざるを得ない(注1)。

2 竹越孝・斉燦・余雅婷・陳曉 2021

現在の議論を異なる資料によって前に進めたい。2021年に刊行された『満漢合璧版『古新聖經』の研究』をとりあげる。同書は著者4名の共同研究の成果が出版されたもので大いに刺激を受けた。テキスト編と論考編からなり、「満州語語彙索引」は竹越氏により全語彙を網羅して作成された労作である。一方、「漢語語彙索引」は、人名・地名と一般語彙とに分けている。本稿の筆者が注目したいのは、一般語彙索引の編纂方針である。「虚詞および口語を中心に収める」方針によっており、収録語彙は、虚詞に重点がおかれ、実詞については、口語すべてが網羅されているわけではない。また文語を排除することで、資料中の語彙の体系だった特徴を見極めることが難しくなっている。「漢語語彙索引」は何のためにあるのだろうか。

ついでながら、同書の論考編所収の陳曉 2021「『満漢合璧版『古新聖經』の漢語語彙の様相」についても、言及しておこう。人名・地名、創造主の訳語というバイブルならではの語句を先に扱い、その後一般語彙を分析する。まず、太田 1969の北京語の七指標により、文法面からの分析を加えた後に、代名詞・名詞、動詞・助動詞、形容詞、介詞、副詞、文末助詞にわけ、数語ずつが用例とともに挙げられる。例えば、“使得”の項は、満漢合璧資料に常用される語とし『清文啓蒙』『清文指要』の用例と対照させる。その一方で、定型表現としての“定不得”(ひょっとしたら…かもしれない)は、『兒女英雄伝』『紅樓夢』の例とともに挙げており、他の満漢合璧資料での出現については言及がない。このように扱う語ごとに、対照させる資料が異なる場合が多く、性格の近似する資料内の語彙全般との比較がなされたのかは本文からは見出しがたい。もちろん、限られた時間内で、論考にまとめられた功績は大きいのだが、もどかしさが拭えないのである。

なお、同論文は文末助詞“麼”が多く用いられ“嗎”が出現しないことを根拠として、18世紀末か

ら19世紀前半の状況の反映であると述べる。この結論に至る議論はおく。語彙の調査が、資料の成立時期を確定するための一つの基準となりうるのは理解できるが、主に時期の判定のために用いられ、それで事足りるとする傾向に本稿筆者は強い不満を感じる。例えば、当該資料の“A”という語は、同時代の他資料においては、その同義語“B”が多数用いられるという現象があるならばその指摘や、或いは、より砕けた言い回しの“C”が当該資料のどの部分では多用される、あるいは同時期の資料では常用される、などの言及が必要であると筆者は考えるのである。また“A”という語をめぐる意義の広がりや、同義語・類義語の輪への論及、あるいはフォーマルな表現か、砕けた表現かという位相にまで視野を広げ資料内の語彙のありようを解明してこそ、語彙の諸相を示したといえるのではないかと。

3 語彙研究とは

本節では、田島統堂2004《比較語彙論—構想と目的の概要—》によって、語彙研究が遅れた点をまず振り返っておきたい。

…そもそも語彙論は、言語学の他の分野に比べて、文字通りの語彙が研究の対象にされることが長らく放置されてきたという極めて特異な偏頗な発達をしてきています。その単位であるところの個々の語の研究は早くから進んでいました。人々が言葉について関心をもったとき最初に個々の語の意味用法が関心の的であったろうと思います。

…語彙全体、文字どおり語の集合としての語彙は、人々の関心を引きませんでした。

…意味分野別構造分析法…何らかの基準によって分割された意味分野にコードを与え、語彙を構成する個々の語をその属する意味分野に配当し、そのコードを与えた後、コード毎、あるいは、いくつかのコードにまとめて集計し、いかなる分野にどれだけの語があるか、つまり、意味分野別の語彙構造を観察する分析法であります。さらに、その実際の手順を含めていけば、そのコード付けには国立国語研究所編『分類語彙表』（1964）を基準にしています。

個別の語の研究ではなく、体系性をもった集合体としての語彙は、長らく着手されることなく放置されてきた分野である。しかし意味分野ごとに配置しなおして、体系性の中で、構造としての語彙を探求する方法があるとの主張がここにはある。

では、日本語学において実践された成果を紹介しよう。『分類語彙表』の体系に即して編まれた宮島達夫1971年『古典対照語彙表』があり、さらに改訂増補された宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉2014『日本古典対照分類語彙表』が出版されている。「万葉集」、「竹取物語」など17作品を取り上げ、すでに出版されていた個別作品の索引から、同一の枠としての『分類語彙表』の体系に語彙を位置づけしなおしたものであって、意味分野ごとの比較、作品間の比較も可能となっている。ただし、『分類語彙表』の意味分類自体に問題のある箇所もあり、とりわけ現代の価値基準とは大きく乖離する箇所や、そもそも解釈が確立していない語は未詳として扱わざるを得ないなどの限界はある。

4 『岩波中国語辞典』の「意味による索引」

本節では中国語学における語彙研究の先駆的業績として《岩波中国語辞典》を挙げておきたい（注2）

まず、この辞書の特徴を数点にまとめておく。

①親字方式をとらず、ピンイン表記による配列を採用。

形音義のうち、音を最優先し、耳で聞いてわかることばを収録という方針を徹底させている。

②品詞の明示。

③語の固さ、柔らかさの表示をおこない、11 ランクに区分。

④意味による索引：意味による索引は、類書（義により配列した語彙の集成）に転用しうる。

このように旧来の字典、辞典の編纂方針にとらわれない革新的な辞書である。

③は以下のような区分により、位相の差を示している。編纂当時のネイティブスピーカーの判断が反映されている。

上の5	古典のなかのことばが、たまたま耳で聞くことばの中に引用されて現れるもの ⁵
上の4	古典のなかのことばではあるが、耳で聞くことばの中にも混用されているもの
上の3	学術その他の専門のことばで、一般には広く使用されていないもの
上の2	文学作品などに現われることば
上の1	ラジオ・テレビ・講演などで現れることば
0	きわめて普通なことば 注記では普通話とする
下の1	ややくだけた言いかた（いわゆる北京語）
下の2	北京の下町ことば、スラングなど 注記では北京土話とする
下の3	特殊な社会で使用される仲間ことば、隠語など
下の4	他人に対する悪口のことば
下の5	北京以外の方言から流入して、いちおう北京でおこなわれていることば

ここで特に紹介したいのは、巻末の「意味による索引」である。辞書本文内の語彙を意味によって分類排列している。意味による配列という方式は先述した日本語の「分類語彙表」と同じである。大見出し、中見出し、小見出しという三段階からなり、小見出しには、同義語が併置されるという構図である。

【大見出し】 指示詞 数詞 量詞 名詞 動詞 形容詞 副詞 介詞 助詞 接続詞 間投詞
擬音語擬態語

【中見出し】 例) 大見出し「動詞」の中における、中見出し：目に関する動作 耳に関する動作 鼻に関する動作 口に関する動作 首から上について 主として手による動作、主として動詞による動作 身体全体の動作 …… 交際・儀礼について、政治について、……

【小見出し】例 中見出し「主として手による動作」の中における、小見出し：指さす、指をおる、指ではかる、はじく、そろばんをはじく、指でおす、ベルをおす、指のはらですりつぶす、かく…

例えば 小見出し「かく」には、挠 抓 抓破 抓坏 抓乱 抓痒痒儿 搔痒 咯吱などがあがる。
この同義語群を③の基準で配置しなおすと、以下のようになる。

上の4	搔痒
0	挠 (ひっかく) 抓 抓破 (ひっかいて傷つける) 抓坏 抓乱
下の1	挠 (かゆいところをかく) 抓破 (相手の顔をつぶす) 咯吱

意味という基準に即して配列したゆえに、複数の同義語の存在が明らかとなり、さらに辞書本文内にもどって語のランクづけを参照することで、同義語グループ内での様相が明らかになる。誠に興味深いことに、“挠”、“抓破”は、「0」と「下の1」のそれぞれに収まる。意味の広がり、あるいは特定の目的語との結束に固定化し意味が縮小した場合は、より北京語色の強い「下の1」になるという現象が観察できる。巻末の意味による索引と、辞書本体部分の両者をつきあわせることで、所収語彙というこの語彙世界の構造的な把握が、かなり可能となっているのである。

5 太田辰夫 1963『『兒女英雄伝』語彙調査』

本節では、太田 1963『『兒女英雄伝』語彙調査』を先駆的業績として紹介する。『兒女英雄伝』にみられる語彙を、『方言詞彙調査手冊』（1955）の枠組み、すなわち、17部門 見出し語 329語により、分類している。その一例を以下に示す。

17-21 **放** (如放在桌子上) (4.24) 一搁 (5.25) 摆 (7.9)

17-22 **休息** 一歇 (4.6) | 歇息 (13.20) 歇乏 (14.12) 歇着 (14.25)

- ・冒頭の数字は分類項目である。
- ・各項の冒頭語**放** (如放在桌子上)、**休息**は、『方言詞彙調査手冊』の見出し語で、この同義語が“一”のあとに並ぶ。
- ・出現頻度にはこだわらず、一度でも出現した語が、採取される。また資料中最初の箇所だけが、()内の数字で示される。『兒女英雄伝』中の回と行を示す。
- ・“|”の右側の語は、『方言詞彙調査手冊』原文にはなく、『兒女英雄伝』で出現した語である。

整理しなおした次の表で再度確認しておきたい。

『方言詞彙調査手冊』見出し語	『兒女英雄伝』
放（「机の上に物をおく」）の意味）	放 搁 摆
休息	歇 歇息 歇乏 歇着

『方言詞彙調査手冊』の見出し語“放” “休息”は、『方言詞彙調査手冊』編纂時点での標準的な語との認識がある。『兒女英雄伝』では、“放”以外に、同義語“搁” “摆”が使用されていることがわかる。これらの出現頻度や、使用状況、同義語とはいえ、意味の違いによる使い分けについては、全用例から再度確認する必要がある。一方、見出し語“休息”の項では、『兒女英雄伝』中“休息”の出現はなく、“歇” “歇息” “歇乏” “歇着” のバリエーションが認められる。これらの位相の差や、出現状況についてはやはり全用例を調べ直してこそ結論をえることが可能となる。

ここで『岩波中国語辞典』のランク付けを加えて、再度検討する。

『方言詞彙調査手冊』見出し語	『兒女英雄伝』中の語
“放” 0	“放” 0 “搁” 下の1 “摆” 0
“休息” 上の1	“歇” 下の1 “歇息” 上の1 “歇乏”は『岩波中国語辞典』に収録がない。

『岩波中国語辞典』の編纂時点と『兒女英雄伝』の成立時点の時間の開きがあり、『岩波中国語辞典』位相の差を『兒女英雄伝』にそのまま適合させることはふさわしくなく、また目的でもない。むしろ『兒女英雄伝』から『岩波中国語辞典』に至る推移のなかで、当該意味項目のなかで、どの語が淘汰されたのか、あるいは、意味・用法の棲み分けが進んだ結果、どの語が代表語としての地位を得るまで意義・用法が定着したのか、などの疑問を解明する糸口となるのではないだろうか。

以上の点から『方言詞彙調査手冊』にみられる意味分類の枠にいったん、語彙を振り分けただうえで、複数の資料を対照させる方式をとることが、語彙の消長や、層をもった語彙の実態を明らかにするうえで、有効であると主張したい（注3）。

しかし、『方言詞彙調査手冊』自体のもつ限界ももちろん考慮すべきであろう。以下数点にわたって課題とすべき事項を検討していく。

・基礎語彙、基本語を対象とした調査に依拠するゆえに、意味分類の枠から漏れ落ちる語が大量にある。文学言語の場合、とりわけその傾向が強くなる恐れがある。仮に『方言詞彙調査手冊』の後継となる方言調査語彙表によるとするならば、より細かな意味区分になっているとはいえ、基礎語彙・生活に密着した語彙重視の方針には変わりはなく、当該資料の語彙のごく一部しか掬い取れない嫌いがある。

・同一の意味分類枠内にあると判断する「同義語」の選別が恣意的になりがちである。線引きの困難な場合にしばしば齟齬し、作業は迅速には進めたい。

・多義語の場合には、一語であっても、複数の意味分類枠に配置するよう配慮が必要である。この確定をおこなうためにも、何より、当該用例の正確な意味解釈が作業遂行の大前提となる。

・文学言語を対象とする場合、地の文か会話文か、という区別や、会話内とすれば、公的なやり取りの場面か、砕けた場面か、という差異への配慮、さらには登場人物の出身地域や、教育レベルといった特徴をふくめて、多面的な分析を加えていく必要がある。

・成書過程が複雑な場合、特定の章回に他と異なる特徴が見られる可能性がある。調査対象とするテキストの選定にも慎重さが必要となる。

以上の諸点から、意味分類を基準とした枠を設定したうえで、複数の資料の語彙を分析する手法により語彙の実態解明への期待を述べ、ならびにその困難さ、および克服すべき課題について確認してきた。

回り道のように思える分析方法ではあるが、発音順配列の索引では見落とされる特徴、すなわち語彙の階層性や同義語との棲み分けなどにも目を向けるために、必要な手法であると考ええる。

昨今はテキストの文字検索機能により、瞬時にして字の有無はわかるようになった。誠に便利ではあるが、字ではなく語としての認定は読み手に委ねられ、多義語の場合、どの意味であるのかといった判断は、読み手が十分に読みこんだ上での正確な解釈なしには、成り立たない。長年にわたって当該資料とつきあってこそ、ようやく出発地点に立てるのではないだろうか。『醒世姻縁伝』の研究を続けておられる植田均氏は、『东北方言概念・词典』の意味分類枠に即し、『醒世姻縁伝』の語彙調査に着手しておられる(注4)。

すでに研究を進めておられる先人に追いつくべく、筆者もわずかな歩みであっても前に進めたいと考えている。

6 具体的検討—動詞“拿”を例にとって

本節では動詞、“拿”を例にして、いくつかの研究成果を振り返っておきたい。『岩波中国語辞典』汪维辉 2018、相原茂 2017 の三者を順に紹介する。

6-1 『岩波中国語辞典』

親字方式によらないため、補語付きの語もそれぞれが独立した扱いで、異なる箇所収載される。同じ見出し語で、複数の意義がある場合、意義項目ごとにランクが付される。以下の表は、ランク付けに応じて配列しなおしたものである。

ランク	傘	傘+～
上の1		“傘権” 権力をにぎる “傘定” どこまでも堅持する
0	手に持つ、手に取る ／持っていく、運ぶ ／手に入れる、にぎる、と る、もらう	“傘住” 手でしっかりとにぎる “傘不定” しっかりときめられない：～主意
下の1	つかまえる、とりおさえる ／さしだす、くれる、納める	“傘住” つかまえる：黒旋风～了 “傘得住” (人間を) 自由にあつかえる (家計を) 掌握する “傘不着” (つかもうとしても) うまくつかまらない い “傘不住” もったままでいられない、つかまえてい られない 这块冰, 我～ “傘不住” 自由にあつかえない、掌握できていない
下の2	たかる、ゆする、しぼる/ (態度を) とる、(権限を) にぎる、(心を) つかむ ／人の弱みにつけこむ、足元 を見る、弱点をつかむ、もっ たいをつける ／ちょうどよい時機をみはか らう	“傘得住” (たしかなものを) つかんでいる、おさ えがきく：他～劲儿, 走得慢了 “傘不住” (抽象的にいって) 持っていられない： ～钱 (宵越しの金をもてない) ～人, 当不了头目 (人におさえがきかないようじゃ、親分になれな い)

表への注記：介詞“傘”と、2音節動詞“傘捏”などはこの表では対象外とする。

補語付きの語には“傘不起”“傘不了”などもあるが、この表では煩瑣になるゆえ除外している。

さて、この表により、最も基本的な位置づけである「0」ランクから、「上の1」ランクでのやや硬くフォーマルな使用場面が想定される語、さらに「下の1」、「下の2」ランクにある、より生活場面に密着した語までを一堂に会して比較することが可能となっている。注意を引くのは、「下」のランクであるからといって「下卑た表現」というわけではなく、むしろ抽象度の高い語も含まれている点である。「傘不住钱」「傘不住人」のような例は、具体的な事物を現実の手の中に収めている姿を描写してはいない。こういった例における抽象的な語義に言及があることは、本辞典を再読したゆえの、新たな発見でもあった。「上」のランクに現われる古典語、文言語彙にみられる硬さとは異なる側面から、

日常語の中における抽象的意義についてもないがしろにはしていない 編纂態度に改めて敬意を覚える次第である。

6-2 汪维辉 2018 『汉语核心词的历史与现状研究』

多くの研究成果をあげておられる汪氏の著作の中から、古今の対照を行っている部分を以下に引いておきたい。ここでは、“拿”を取り上げる。

古今词义对照表

現代	古代
拿	拿 (拏)
①动词。用手或其他方式抓住(东西)。	①用手取：握在手里
②动词。用强力取：捉。	②用强力取：擒捉；捕捉
③动词。掌握。	③把握：掌握
④动词。刁难：要挟。	④制服：刁难
⑤动词。装出：故意做出。	⑤矜持：装模作样
⑥动词。领取：得到。	
⑦动词。强烈的作用使物体发生变化。	
⑧介词。引进所凭借的工具、材料、方法等。意思跟“用”相同。	⑥介词。引进所凭借的工具、材料、方法。相当于“用”。
⑨介词。引进所处置或所关涉的对象。	
⑩介词。跟“来说”、“来讲”搭配使用，引进要说明的事情或情况。	
	⑧捉摸。
	⑨拔，擻。指把脚从地面提起。
	⑩擒拿。拳术的一种。

この対照表では、左側の『現代汉语词典』の意義項目の配列順にあわせて右側に古代の意義項目を対比している。一瞥してわかることは、『現代汉语词典』の⑥⑦の意義項目は、新しい語義であること、介詞用法の内、⑨⑩は新たな用法であること。古代での意義項目⑧⑨⑩は現代に継承されていないこと。この3点である。さらに意義項目の配列順に着目するなら、おおむね原義から派生義への展開を踏まえているかと思われる。①の「手でつかむ」という具体的な動作から、②「つかまえる」③「掌握する」への展開は、特定の対象物への特化や、抽象化により生じた転義で、これは、古代の意義項目の展開、つまり①から②③への展開をおそらく継承していると推測できる。

同書は“拿”類として同義語“執 持 秉 握 將 把 捉”も論述している。一例として“秉”の対照表を引用する。

現代	古代
秉	秉
	①禾束：禾把。
①《書》拿着：握着。	②拿：執持。
②《書》掌握：主持。	③主持：掌握
③ ^量 古代容量單位。一秉合十六斛。	④量詞。十六斛。
④ ^名 姓。	⑤姓。
	⑥隨順。
	⑦保持：堅持。
	⑧依據：準則。
	⑨通“稟”。承受。
	⑩通“柄”。權柄。
	⑪通“謗”。

“秉”は名詞が原義で、2番目の意味項目において具体的な動作を表す動詞となり、より抽象度の高い③⑦などへと展開している。“拿”に比べて、現代での活躍の場は少なく、①②の意義として書面語内での出現に限られることがこの対照表からはわかる。興味深いことに、古代の②から③⑦の展開、すなわち具体的動詞から抽象度の高い動詞への展開は、“拿”のそれと同様の転義の筋道をたどっている。同義語グループにおける意義展開に見られる共通性を示してもいる。

汪維輝 2018 は、同義語グループ“拿”類の通時的変化について詳述する。以下に簡単にまとめておく。

先秦 “執”が最も使用頻度が高い。“持” “秉” “操” “把” “握” もあり。

兩漢 “持”の頻度が“執”に優る。

魏晉南北 “持” “捉” “執”が常用される。

唐五代 “把”が優勢。“捉”は、拿類から「逮捕」の意義へと転換。

“拈” “擎”が増え始める。

宋金 “把”と“將”が拮抗。執” “持”はほぼ退出。

元 “將” “拿”が優勢。

明清 “拿”が“將”にとってかわる。

極めて簡略に示したが、時代の推移とともに同義語グループ内で新たに優勢な語が生まれ、別意義に展開して別グループへ移行する例があることをふくめ、仔細に示されており、誠に興味深い。同義語グループというひとつの括りのなかで通時的な変遷を追っていく方法は、手堅い手法であると思う。

このほか、同書は現代方言 42 地点での使用状況を示しており、42 点中 14 地点は、“拿” と他の動詞を併用し、共存していることが明示されている。通時的観点と、現時点での地域差という観点の両方を備えた稀有な著書であると思われる。

6-3 相原茂 2017 『中国語学習シソーラス辞典』

本節では、学習者向けに編纂された『中国語学習シソーラス辞典』を取り上げたい。まずは「序」の引用により、本書の編纂方針、意義を確認しておこう。

…本書がいう「シソーラス (Thesaurus)」とは単語の上位/下位関係、部分/全体関係、同義関係、類義関係などによって単語を分類し、体系づけた類語辞典である。…中国語の広い意味での類義表現全体を見渡せるマップが必要なのである。…

単語を分類し、体系づけた類語辞典の重要性について、本稿筆者は深く同意するものである。前述した『岩波中国語辞典』の「意味による索引」の編纂目的と通底していることが期待される。

以下に「凡例にかえて」より引用し、その編纂方針を確認しておこう。

- ①似た意味をもつ語のゆるやかな集合をめざす。
- ②日本語の五十音順記列
- ③類義語内は、ピンイン順記列
- ④親字の重要度について、マークで表示

最重要語★/重要語★★/次重要語* 三区分別によって示す

①の方針、つまり「ゆるやかな集合」については、納得できるものである。厳密な意義分類に依拠すると、かえって混乱を招きかねない。

②の方針、日本語の五十音順による配列することで、意味分類としての体系性が失われるのみならず、近似した意味の語が、離れた位置に収録され学習者には気付かれぬ。序に示された「全体を見渡せるマップ」の構造には、なりえない。

③の方針、類義語内での配列はピンイン順によることで、典型語、代表語たる最上位の単語であれ、下位にある語であれ、発音順の原則で配置される。

④親字の重要度について、マークで表示される。最重要語/重要語/次重要語の三区分別は頻度に依拠するかと推測されるが、③の方針により発音順記列となった欠点を補うべく設定したものである

う。問題は、異なる箇所、異なる意味で複数回、収録されている語に関して、当該の意味が、最重要・重要・次重要ということなのか、不明である点である。

具体例として、“拿”の収録箇所をあげよう。“拿”は同書において4か所に収録されている。簡便にするため、原文の用例と解説部分は省略する。

p. 530	とる	手に取る	: 递 接 拿 取 收 握 执 抓
p. 556	にぎる	握る	: 把 把握 操 持 揪 拿 捏 握 抓 攥
p. 626	ひろう	拾う	: 拣 捡 拿 拾 拾取 挑 摘 找
p. 725	もつ	(手で) 持つ	: 抱 持 端 拿 捧 提 握 抓

編集方針③にある通り、ピンイン順の配列によるため、「(手で)持つ」動詞の典型的な語で、代表的な地位にあるべき“拿”が、先頭には来ず、上位・下位の関係は不明瞭である。また、口語での使用は極めて限定的な“执” “操”が他の語と同じ平面上にあげられる点にも違和感が拭えない。

さらに加えると“拿”のように、日本語の表現により複数箇所収録される場合、相互参照の頁が記されていないのは、不親切な扱いといえよう。総じて、本書の実態から判断すると、「序」で述べられた「中国語の広い意味での類義表現全体を見渡せるマップ」は現実化してはいない。語彙の体系性を失うことなく学習者にわかりやすく提示する類語辞典の出現にはまだ何段階もの工夫が必要であろう。

7 今後に向けて

本稿は、体系性をもった語彙の研究を提唱するべく執筆したものである。意味分類に基づいた先学の研究成果の再評価と、最新の研究成果を紹介してきた。多くの学ぶべき事例と、克服すべき課題を確認することができた。簡単に表にまとめておく。

	階層性	地域差	通時的分析
岩波中国語辞典 「意味による索引」	辞書本文部分に記述 にあり	ほぼみられ ない	
儿女英雄伝語彙調査	口語に限定せず採録		
汉语核心词的历史与现状研究	現代の記述部分で書 面語と明示	○	○
学習シソーラス辞典			

『汉语核心词的历史与现状研究』の総合的な記述には、感服するしかないが、個々の研究者には一体何ができるのだろうか。短期間に通時的分析をめざすことには困難がたちはだかる。一人一人の研究

者が、個別の資料・作品と向きあい、いったん、意味分類の枠組みのなかで、それぞれの体系だった語彙世界を把握し、明示すること、同一資料内における諸相の解明を含めて、研究成果を蓄積していくことを提唱したい。そのうえで、共通の意味枠組のなかで、異なる資料・作品との比較対照を通じて、語彙の変遷、消長、交替を浮き彫りにすることが、語彙史の解明につながるであろう。

振り返れば、40数年前に『南山俗語考』という資料と出会ったことが、今回の執筆の契機となっている。当初は薩摩藩で編まれた一唐話資料としか考えておらず、まずは、稿本『南山考講記』との対照のために、カードを取りピンイン順記列へという作業に着手した。しかし所収語彙を発音順にすることで、『南山俗語考』自体のもつ分類語彙辞典としての最大の特色を消し去ってしまうという徒労感と罪悪感が募るばかりであった(注5)。その解決方法を探り続けた40年であったともいえる。

今、原点にもどり、先学の研究業績から多くの学びを得て、改めて叱咤激励されているように感じられる。

注

1 語彙については2017年に『『南山俗語考』翻字と索引』を出版し、他資料との全般的な対照がようやく容易となった。岩田憲幸2020の出版とあいまって、近似性の高い資料同士を調査する基盤が整いつつある。ただし発音順の索引が語彙の体系性の把握に直結するというわけではない。

2 編纂に従事された宮田一郎先生が当時を述懐されている記述が、講演録(宮田一郎2018)にある。

老舎の『離婚』の語彙の担当となり、意味・用法の仔細な違いに至るまで、一例たりともないがしるにせず徹底的に調べあげる手法がその後の研究の土台になったという。

3 見出し語の統一のもと複数の資料を対照させた研究では、坂井健一・木村晟1975があり、「日本風土記」・「日本寄語」・「日本館譯語」・「琉球館譯語」・「朝鮮館譯語」・「日本一鑑」の寄語を配置して提示している。昭和49年度科学研究費補助金による『近世中国における日本語資料の集取整理と語学的研究』の成果報告である。

4 筆者と植田均氏との私信による。『东北方言概念词典』は、“Chinese Concept Dictionary 中文概念词典”に基づいており、分類は非常に細微となっている。

5 拙論、岩本2010は、『南山俗語考』の分類項目名の選定には、『清文鑑』の項目名が背後にあり参照されたと述べる。

参考文献

相原茂2017『中国語学習シソーラス辞典』朝日出版社

岩田憲幸2020『『三字唐話』の研究 基礎資料篇』白帝社

岩本真理1989a「『南山俗語考』のこぼれ」『鹿兒島経大論集』30-1

岩本真理1989b「『南山俗語考』の語彙的特徴」『人文研究』41-5

<https://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/contents/osakacu/kiyo/DBd0410502.pdf>

(以下にあげる『人文研究』所収論文も同じコンテンツ内に収蔵される)

岩本真理 1991 「『南山俗語考』の唐音について (1)」 『人文研究』 43-11

岩本真理 1992 「『南山俗語考』の唐音について (2)」 『人文研究』 44-5

岩本真理 1993 「『南山俗語考』の唐音について (3)」 『人文研究』 45-5

岩本真理 2010 博士論文『『南山俗語考』の研究』 大阪市立大学第 5567 号

https://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/file/meta_pub/detail

岩本真理 2017 『『南山俗語考』 翻字と索引』 中国書店

太田辰夫 1963 「『兒女英雄伝』 語彙調査」 『清末文学言語研究会会報』 第 3 号 (白帝社から復刻版の刊行がある)

太田辰夫 1965 「北京語の文法特点」 『久重福三郎先生・坂本一郎先生還暦記念中国研究—経済・文学・語学』

日下恒夫 1974 「清代南京官話方言の一斑—泊園文庫蔵《官話指南》の書き入れ—」 『関西大学中国文学会紀要』 5

倉石武四郎 1963 『岩波中国語辞典』 岩波書店

国立国語研究所 2004 『分類語彙表 増補改訂版』 国立国語研究所資料集 14 大日本図書

坂井健一・木村晟 1975 『「日本風土記」・「日本寄語」・「日本館譯語」・「琉球館譯語」・「朝鮮館譯語」・「日本一鑑」 寄語対照手冊』

佐藤晴彦 1973 「《正音咀華》のことば—近世白話史の一資料—」 『人文研究』 25

佐藤晴彦 1979 「琉球写本官話課本のことば」 『中国語学』 262

竹越孝・斉燦・余雅婷・陳曉 2021 「漢語語彙索引」 『満漢合璧版『古新聖經』の研究』 好文出版

田島統堂 2004 「比較語彙論—構想と目的の概要—」 『語彙研究の課題』 和泉書院

陳曉 2021 「『満漢合璧版『古新聖經』の漢語語彙の様相」 『満漢合璧版『古新聖經』の研究』 好文出版

宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉 2014 『日本古典対照分類語彙表』 笠間書院

宮田一郎 2018 「中国語 77 年」 『高等学校中国語教育研究会会報』 27

汪維輝 2018 《汉语核心词的历史与现状研究》 商务印书馆

尹世超 2010 《东北方言概念词典》 黑龙江大学出版社